

令和3年11月6日

「世田谷区認知症とともに生きる希望条例」

施行1周年記念イベント

**認知症体験者と語り合おう！！**  
**とともに生きる今と未来**

～いっしょにつくる希望のまち 世田谷～

於：日本大学文理学部 本館 センターホール

(世田谷区桜上水3-25-40)

午後 2 時開会

**【公開用動画 開会～基調講演】**

望月介護予防・地域支援課長 皆さん、こんにちは。定刻になりましたので、ただいまより「世田谷区認知症とともに生きる希望条例」施行 1 周年記念イベントを開会いたします。

本日は、このように多くの皆様にお越しいただきまして、本当にありがとうございます。

私は事務局の高齢福祉部介護予防・地域支援課長の望月と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、本日は新型コロナウイルス感染防止の観点から、参加者の人数を会場の定員の 50% としております。そして、皆様にはマスクの着用及び入室時の検温、アルコール消毒の御協力をいただき、誠にありがとうございます。

次に、会場内でのオリエンテーションを行います。

恐れ入りますが、携帯電話は電源を切るかマナーモードに設定していただきますようお願いいたします。

また、会場内では、飲食は水分補給のみとさせていただきます。

なお、本日のイベントは、後日、動画配信等を行うため、撮影を行っております。動画や写真撮影等を控えてほしい方がいらっしゃいましたら、お近くの腕章をつけたスタッフにお声がけくださいますようお願いいたします。

では、本日のプログラムを御説明いたします。お配りしております資料のプログラムを御覧ください。

まず、保坂区長からの挨拶と条例等の紹介の後、第 1 部は基調講演で、講師は丹野智文さんとなっております。第 2 部、丹野智文さんと世田谷区の認知症体験者 3 名によるパネルディスカッション、そして、第 3 部は意見交換となっております。

また、第 2 部のパネルディスカッション終了後の休憩時間に腕章をつけたスタッフが質問票を回収させていただきます、第 3 部の意見交換の際に活用させていただきますので、第 1 部の基調講演や第 2 部のパネルディスカッションの内容で御質問のある方は、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、開会に先立ちまして、世田谷区長、保坂展人より御挨拶及び条例、計画の紹介を行います。区長、よろしくお願いいたします。

# 認知症体験者と語り合おう！！ ともに生きる今と未来 ～いっしょにつくる希望のまち世田谷～

世田谷区長 保坂 展人



イメージキャラクター  
あんすこ君

2021年11月6日（土）

1

保坂区長 皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂展人です。今日は、それぞれお忙しいところを当シンポジウムに御参加、ありがとうございました。早速、座ってお話しさせていただきたいと思います。

今日は、世田谷区で認知症とともに生きる希望条例が施行されてちょうど1年ということを記念するシンポジウムでございます。「認知症体験者と語り合おう！！ともに生きる今と未来～いっしょにつくる希望のまち世田谷～」と銘打って内容を準備していただきました。


この条例なんですけれども、これまでの認知症観、認知症になるとほとんどのことができなくなる、周囲のサポートがないと危ないというような、認知症という診断が下った途端に人格が一変するような受け取り方を私たちの社会はしてきたのではないかと。

私自身も母が認知症で何年か、症状は次第に進んではきたんですけれども、しかし、お話をするのがとても好きな母だったので、私がお話をして、子ども時代の話、女学校時代に横須賀の軍需工場に行ってこんなことがあったとか、戦後の話、子育ての話、初めて知る話を実に克明にしてくれるということで、こうやって話をすることができるんだよねと。ただ、時間のことについて、昨日のこととか2時間前のことについてだとおぼろげというか、なかなか記憶に残せないというのはもちろんあったわけなんです。

このシンポジウムはこの条例が一つの引き金になって行われているわけなんですけれども、認知症をめぐる条例をつくらうといったときに、各地で条例が生まれています。その各地の条例を足して割ったような条例というのでも考えられな

くはないんですが、しかし、実は世田谷区ではそれぞれの分野で認知症に対する精力的な、また先進的な取組が行われています。そして、これは行政あるいは福祉・介護関係者、医療関係者だけではなくて、認知症を取り巻く御家族も含めた市民活動、そういった場でもかなりの厚みのある活動があったということで、区民の熱い思いと、そして何より当事者の方のお声をしっかり入れながらの条例にしていこう、そういう気概を持って始まった、そして出来上がった。できたら今度はこの条例を回していく、動かしていくためにも、当事者の方の御参加ということが必要だと。

今日は記念講演に丹野さんに来ていただいています。「認知症の私から見える社会」という1冊、9月に出版の本なんですけれども、まとめていただいています。後ほどゆっくりお話を伺いたいと思います。




## 世田谷区の現状

令和3年4月1日現在

<b>■総人口</b>	920,471人
<b>■65歳以上人口</b> (20.18%)	185,753人
<b>■介護保険の要支援・要介護認定者数</b>	約40,727人
<b>■認知症高齢者数</b>	24,090人

※前期高齢者よりも後期高齢者(75歳以上)が多く、将来推計でも増える見込み  
⇒80歳以上は、要介護高齢者の出現率、認知症高齢者の有病率が高くなる



28のまちづくりセンター

次のスライドですが、世田谷区の概略について、人口が92万人です。住民記録台帳は92万人を今少しだけ割っていますが、国勢調査を昨年の10月にやったところの数字は94万5,000人、こういう数字が出ています。住民登録をしないで住んでいる方になると95万人近い方々がいるという非常に過密で巨大な区であります。65歳人口が2割ということで、18万5,000の方がいらっしゃる。このうち、介護認定を受けられている方が4万人、そして、そのうち2万4,000の方が認知症であるということでございます。軽度の方も含めれば5万人近くの方が何らかの形で認知症と向き合っている当事者であり、当事者のお連れ合い、あるいはその家族、友人、そうやって考えると、世田谷区民でおそらく、少なく見ても10数万人がこのことと向き合っている。区内最大の大きな問

題、悩み、そして何とかしなければということで、日々、それぞれの形で手探りでこの問題にぶつかっているというテーマかと思います。

右側の図はちょっと細かいです。一つ一つ読みづらいかもしれませんが、細かく住区が28に割ってあるということ、皆さんの手元にもスライドのコピーがあると思いますので、後ほど見ていただけたらと思うのですが、今日の報告の中で、特にこの条例をどう実施するのかというところで、この28のまちづくりセンターはとても重要になってきます。

65歳以上の方にちょうど4月、5月、ワクチンの予約という極めて厳しい、我々行政の側にとっても反省点もいっぱいあるんですけども、申し込まれた方が一日中電話をしたけれども全然つながらないと、パソコンも途中で止まってしまうということで、大変お叱りもいただいたのですが、職員といろいろ相談して、この28まちづくりセンターでもスマホとかタブレットでワクチンの予約を取ってあげましょうということでやったところ、1万4,000人の65歳以上の方がここで予約を取ることができました。

そういう意味では、まちづくりセンター、地域包括支援センター、世田谷区ではあんしんすこやかセンターとありますが、ここと社会福祉協議会、この3者が一体になって、地域の福祉のお話なら何でもどうぞと、高齢介護に限らず受け止めていくというような仕組みになってございます。そういうことで、世田谷区はこんな資源を使いながら、もう一つ、梅丘に認知症在宅生活サポートセンター にんさぽと略しているんですかね というところもできております。

昨年10月に開催した条例制定記念シンポジウムも大変反響がありまして、新聞報道を含めていろいろと波紋が広がりました。この条例は一つの希望条例という、なかなか行政用語には珍しいというか、ほとんどない言い方をしているのですが、やはり認知症をめぐる偏見とか差別というものを大きく転換していくメルクマールとなる条例にしようという思いが広くございます。



● 認知症の本人が参画した

「世田谷区認知症とともに生きる希望条例」 令和2年10月施行

1、本人の主な声

- ・ 条例は子どもから大人まで全ての区民を対象にして欲しい
- ・ 条例の名称に「希望」が入った方が良い
- ・ 認知症のサポーターではなく「パートナー」が良い

2、議論を重ね大事にした点

- ① 認知症本人の条例制定から施策の推進までの参画
- ② 従来の認知症観を転換し「希望」のある前向きな考え方へ
- ③ 予防ではなく「備え」へ      ④ 認知症のサポーターではなく「パートナー」へ
- ⑤ 認知症の人の「意思」「権利」の尊重

■ 「世田谷区認知症とともに生きる希望計画」 令和3年3月策定

重点テーマ	プロジェクト
1. 認知症観の転換	1. 情報発信・共有プロジェクト
2. 本人の発信・参加、ともに作る	2. 本人発信・参画プロジェクト
3. みんなが「備える」 「私の希望ファイル」	3. 「私の希望ファイル」プロジェクト
4. 希望と人権を大切に、暮らしやすい地域をともに作る	4. 地域づくりプロジェクト

3

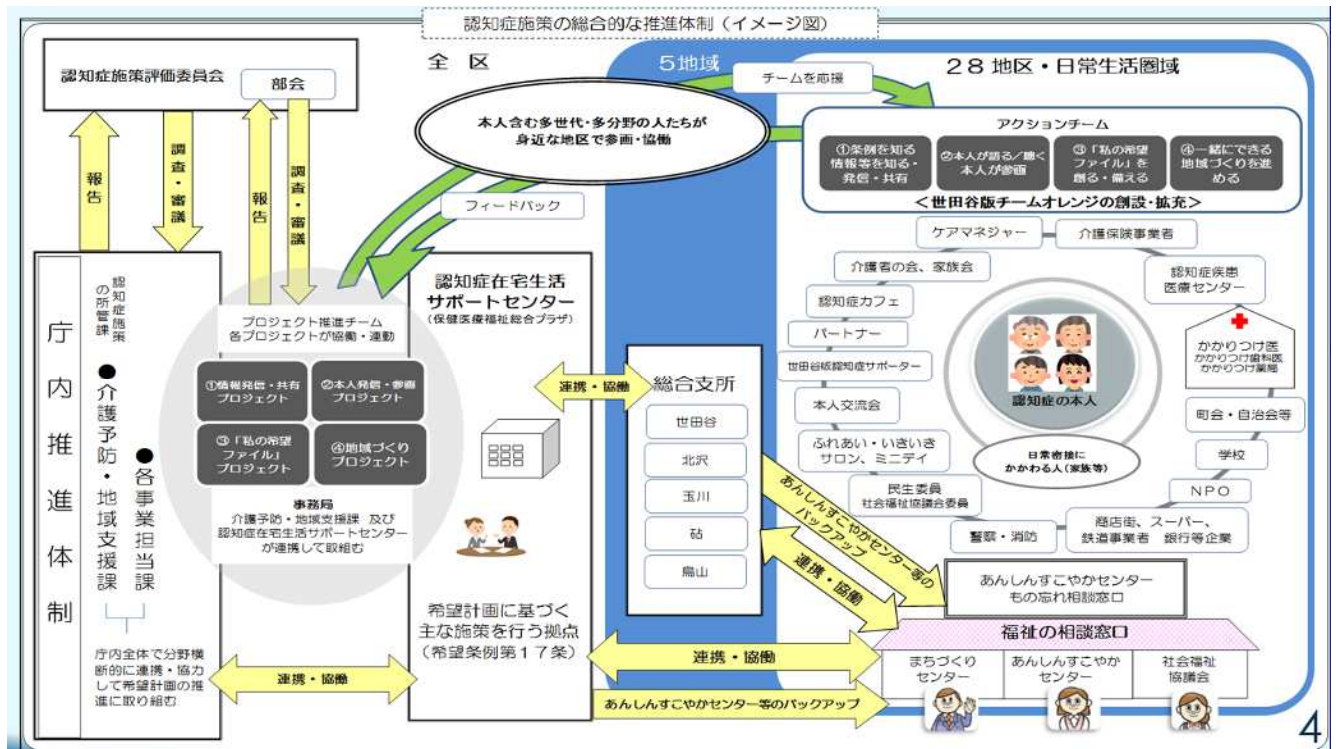
次のスライドですが、この希望という言葉ですが、差別、偏見を取り払い、認知症当事者が尊厳を持って地域で暮らすことができるようにということで、一つこういふ地域に世田谷区をしていくんだと。世田谷区の認知症は、やはり当事者の方の尊厳、考えていらっしゃることをしっかりお聞きしながら、共に歩んでいこうという趣旨でございます。

そういった中で、今日も丹野さんの講演の後、丹野さんのコーディネートのもとに条例の検討、そして現在に至るまで、この認知症をめぐる世田谷区の新たな挑戦に当事者として貴重な御発言をさせていただいている方々に登壇をさせていただいて、お話を聞きたいと思っております。

当事者の方々から出た意見の中では、やはり明るい名前にしてほしいと。ですから、希望がある、希望条例という名前がいいんじゃないですかねというようなお声もございました。そして、認知症は予防じゃなくて備えるということが重要だねとか、あと、認知症の方を支えるサポーターという言い方をしていたんですが、サポーターではなくて、共に人生を歩んでいくパートナーという言い方でどうだろうか。認知症の方の意思や権利の尊重ということをそんなことでお話をしてまいりました。

スライドの下のほうですが、これからのこの条例を受けた希望計画というものをつくりまして、4つの重点テーマ、1つは認知症観の転換、2番目に認知症当事者、御本人の意見を発表したり、プロセスに参加したり、これをどうやってつくるのか、3番目にみんなが「備える」「私の希望ファイル」、4番目に希望と人権を大切に、暮らしやすい地域をともに作る、この4つを重点テーマ

としまして、それぞれにプロジェクトを設けて推進をしていこうと。内容については後ほど御説明をさせていただきます。



さて、最後のスライドになります。これは細か過ぎて一つ一つ御覧になるのは難しいかもしれませんが、左側にあるのが4つの重点テーマに基づくプロジェクトでございます。ここで世田谷区役所の担当部、担当課、認知症施策評価委員会の皆さんが議論を続けています。そして、実際にこの認知症とともに生きる希望条例が生きて動き出していくためには、実際に今日も相談があるでしょう。いろんなアドバイスがあるかもしれない。あるいは、御本人の状態をめぐって家族で少し対立があったりとか、いろんなことが、世田谷区内で起きています。

28のまちづくりセンターにある福祉の相談窓口の中で、この認知症の条例の中身を具現化するような実践ができないだろうか。もう既に実践を始めていらっしゃるところもありますし、後ほどいろいろお話があると思いますけれども、この条例ってどういう中身なんですかということ、大熊さんをはじめ、何人かの方で行脚していただいて、いろいろお話を広げていただいていると聞いております。

こうして、図の右側のまちづくりセンターだけがそこで頑張るということではなくて、その周辺の地域の町会・自治会、学校、NPO、商店街であるとか、様々な地域資源等の全てが認知症に対する考え方を、これまでとは違う考え方でいこうねと。つまり、何もできなくなるのではなくて、できるところで地域に参画していただく。そして尊厳を持って自らの人生をできる限り地域の中で

互いにサポートをしながら過ごしていけるような地域にしていきたいと。

この理念をしっかりと盛り込んだ条例がスタートして1年になりましたけれども、歩み出しはまだ1合目、2合目かもしれないです。その中身を本当にしっかりしたものにするために、今日は多くの皆さんに集まっていただきました。

以上、御説明と御挨拶を兼ねて冒頭の発言といたします。ありがとうございました。(拍手)

望月介護予防・地域支援課長 続きまして、第1部、基調講演に移らせていただきます。

それでは、丹野智文様、世田谷区認知症政策評価委員会の委員長、大熊委員長、どうぞよろしくお願いいたします。

大熊由紀子氏 皆さん、本当によろこそおいでくださいました。世田谷下馬に住んでおります大熊由紀子と申します。私は、福祉と医療・現場と政策をつなぐ「えにし」の会というのをやっております。私は志の縁結び係&小間使いというのを肩書としております。皆様と丹野さんの縁結びを今日させていただきたいと思っております。

最初に出会ったシンポジウムは、全部あだ名、ニックネームで呼び合うことになっていましたので、そのあとずっと、たんちゃん、ゆきちゃんという間柄になっております。フェイスブックのメッセージの欄なんかですと、あっという間にお返事が来ます。

今日、皆さん、この御本を持っている方は何人ぐらいいらっしゃるかしら。あっという間に3刷りになりまして、1万部で、先ほどの望月課長さん、買おうと思ったら1か月待ってくださいって、悲鳴が来たような本です。それだけのことはありまして、300人の御本人から聞いたお話がまとまっています。丹野さんが頭で考えたり、ましてゴーストライターがいたりとか、そういうものではなく、どうやってこれが出来上がったかもまたお話ししていただきたいと思っております。

去年の創立、条例ができましたというときには、3人の御本人 あのときは2人だったかな が出ていただいて、認知症の人も人前でお話ができるんだというのが皆さんの驚きでした。今年はそれよりもう一步進めたいと思ひまして、認知症御本人の方がコーディネーターをしていただくというのが多分前代未聞、世田谷ならではのということで、ぜひコーディネート腕前を。

丹野さんも最初に会ったときは、原稿用紙に5分間で話す分量を書いてきて、読み上げていらっしゃるというふうでした。それが今や当意即妙にコーディネーターをされるという、認知症になってからどんどん先へ先へと進んでいらっしゃるという、それを今日は堪能していただきたいと思ひます。

その前に、なぜこの本を書いたのか、どうやって書いたのかということを含



めて基調講演をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

丹野智文氏 皆さん、こんにちは。ありがとうございます。(拍手)宮城県仙台市から来ました丹野智文と申します。

私は8年前、39歳のときに若年性アルツハイマー型認知症と診断されました。実はその5年前、33歳の頃から徐々に記憶が悪くなっていった感じがします。でも、自分の中では病気とは思ってなくて、本当に営業が大変というか、楽しくやってはいたんだけど、一番お客様の数を持っていたので、だから大変なんだなと思っていました。でも、忘れもしない、38歳のときに、一緒に働いている同僚の顔と名前を忘れてしまって、声をかけたくてもかけられなくなりました。本当におかしいなと思って、一旦席に戻って人員表を見て話しかけたときもありました。

認知症という病名は知っていたけれども、どういう病気かも分からなくて、本当にストレスが多いなと思って、クリスマスの日、病院に行きました。それが38歳でした。そうしたら、すぐ大きい病院に行ってみなと言われて、ちょっとおかしいと。大きい病院に行ったらすぐ検査入院をしよう。2週間入院をしました。担当の先生からは、多分、認知症だとは思いますが、30代というのを診断したことがないと。次に大学病院へ行ってくれと言われて、大学病院へ行って、1か月間入院をして、それで39歳のときに認知症という診断名がつけました。そのとき、私の子どもたち2人はまだ小学生でした。これから本当にどうなっていくんだろう。そして、妻、子どもたち、本当に生活できるんだろうか。そんなことをずっと思っていました。

そのときに、入院しているときに認知症自体をよく分かっていなかったもので、インターネットで調べてみました。本当に寝られなくなっちゃって怖くて、認知症というのを調べていたら、若年性認知症は進行が早くてすぐに寝たきりで、10年後には亡くなると書いてあったんですよ。それを本当に信じ込んでしまって、2年後に寝たきりか、どうしたらいいんだろうと思って、退院後、すぐに区役所や地域包括支援センターに行ってみました。そうしたら、どこに行っても言われるのが、介護保険の話ばかり。会社を辞めてデイサービスに行ったらとしか言われなかったです。でも、子どもはまだ小学生なんですよ。何を言っているんだろう、こいつらはと思って、私が欲しかった情報はそこではないですよ。今までの生活をどのようにしたら続けていけるかということを知りたかったけれども、誰もそのことについて教えてくれることはありませんでした。

本当にどうやって生きていったらいいんだろう、もう本当に人生終わったと思っていました。でも、たまたま私はネットヨタ仙台に勤めていて、その社長に、本当に首になると思って、土下座してでもいいから洗車でもさせてもらえないかなと思って言いに行ったら、体は動くんだろう、戻ってきなさいっ

て言ってくれて、それで総務・人事グループへ所属を変更することになりました。本当に新しい仕事ってできるのかなと思って不安だったけれども、認めてもらいたくて、ノートに書きながら一生懸命仕事をしました。その結果、今も会社に所属をしながら、このような活動をしています。

診断されて1年ぐらいたったときに、たまたま認知症の当事者と出会う機会がありました。それは、認知症の人と家族の会の関係でちょっと会うことがあって、2年で寝たきりと書いてあったのを信じていたときなのに、たまたま会った人が6年たっているのに元気で人に優しく、本当にこの人は認知症のかなと思うぐらいの人でした。今の私みたいなものですよね。そうしたら、俺も1年半、家に引き籠もってねと言われたので、へえ、そうなんだと思って、2泊3日一緒にいたら、すごいね、元気だし人に優しく、俺、間違っている、2年で寝たきりって何なんだろうと思って。この人のように生きたいと思ったことが最初でした。

そして、たまたま講演という機会があって、人前でしゃべるようになりました。そこで、2回目の講演のときに宮城県の仲間たちと出会うことがあり、そのときに、丹野君は何でこんなに元気になったのと言われたので、たった1人の当事者と出会ってそういうふうに元気になったんだよということを伝えたら、それってすごく大切なことだよなって。じゃあ、今度は丹野君がほかの人にそれを伝えない？と言われて、7年前、「おれんじドア」という、不安を持った当事者と元気な当事者が相談できる場をつくりました。そこでも新規で100名を超える当事者が通ってきました。そこでも100名ちょっととしゃべったかな。

その後、もう7年やっているけれども、3年前に「おれんじドア」に来られる人っていいよね、まだまだ家に引き籠もっている人っていっぱいいるでしょう、丹野君、どうするのって言われたから、何で俺にどうするのって、みんなが考えればいいでしょうと思ったんだけど、じゃあ、考えようと思って、考えました。100%会える仕組み。これは、病院の中ですよ。病院の先生と話し合っ、て、診断が終わったり診察が終わったら、すぐ近くの部屋で元気な当事者と不安を持った当事者家族が出会える仕組みをつくりました。本当にすぐです。なので、すぐに介護保険の話もしないし、8年たっているからこんなに元気だよという姿を見せられます。

本当に何を言っているかという、診断されて本当にすぐの人、これから先どう生きていったらいいかわからない、そのときに私が言う言葉があります。今、診断されたかもしれないけれども、今日の自分と明日の自分は何も変わらない。1週間後、何も変わらない、1か月後も何にも変わらない。1年後、進行するかもしれない。じゃあ、1年かけて進行するにしたがって工夫することをみんなで話し合おう。そうすれば困らなくはなるよという話をしました。そう

やって、とにかく当事者同士が出会える仕組みをつくって、当事者からいろんな話を聞いてきました。

当事者の話の中で一番多かったのが、まず、認知症と診断されて一番嫌だったこと、子ども扱いされること、1人で出かけるのを禁止された、財布を持つのを禁止された、この3つがあったんですよ。みんな嫌だと言っているのに、じゃあ、道に迷ったことあるのと言ったら、ない。財布はなくしたことあるの、うん、なくした、1回だけ。普通の人ですよ。普通の人なんですよ。でも、認知症という病名がつくと、先回りをして何でも止めてしまう。

その病院の中でも、今は月4回かな、ピアサポートをやっているんだけど、私がやっているだけでなく、今、40代から87歳の人までやってくれていて、6人います。逆に、レビー小体型の人にはレビー小体型の人と会わせたい。あとは、女性だったら女性の人と会わせたいとかということで、先生がこの日には丹野君がいるなといったら、その日に予約を入れちゃうんですよ、知らん顔して。そうすると、勝手に会えるんですよ。だから100%会える仕組みと言ったんですね。

その病院では今、運転免許を考える集いというのもやっています。なかなか認知症になって運転をやめると家族が言ってもやめませんよね。でも、運転をやめた当事者とやめたくない当事者がとことんまで話し合う場をつくりました。で、やめた当事者はメリット、デメリットをちゃんと伝えてくれます。そうすることで、本人は一生懸命考えます。バスはないし最悪だよとか言いながらも、車で事故を起こさなくなると思ったらすごく気が楽になった。車の維持費を考えたらタクシー代のほうが安かった。そういう話合いをしていくと、一、二回ではやめないけれども、三、四回で間違いなくやめるんですよ。

そして、自分で決めてやめた当事者は、その後、奪われたという言葉は絶対言わないです。家族が鍵とかを奪ったりした人たちは、常に言うんですよ、奪われたと。その後、暴れたり、無免許で運転したりもするんですよ。それっておかしいよねって。自分で決めていないからね。だから、自分で決めることを応援しています。

そして、実は、リカバリーカレッジという勉強会も当事者だけでやっています。そこに今、十五、六人来るかな。来たい人が来ればいいと言っているんだけど、そして、勉強会をしているんですけども、仙台の町なかでやっています。地下鉄やバスを使って1人で来る人がほとんどです、今。今まで、認知症の人が1人で来るって、あり得なかったんですよ。でも、ほとんどの人が1人で来ます。でも、ほとんどの人が道に迷っています。認知症だから。いいんですよ、全然。遅刻してきてもいいと言っているんですよ。遅刻してきてもいいよって。でも、1人で来てみなと言って、来るんですよ。

そして、大切なのは、みんながたどり着いてから、どのように来たかという話し合いをしています。そうすると、どうやって来たと言うと、道に迷ったよと言うから、認知症だからしょうがないよねって。じゃあ、本当にどうやって来たと言うと、人に聞いてきた人が多かったです。じゃあ、誰に聞いてきた、おじさんに聞いたら反対方向を教えられた。学生に聞いたら、スマホで調べて教えてくれた。じゃあ、次来るとき、どうせまた道に迷うんだから、学生に聞けばうまくいくよねという備えをつくっています。これを支援者に言うと、道に迷ったと言うと、じゃあ、次は私は迎えに行くよ、誰かと一緒に来てねと言って自立を奪ってしまうんですよ。そうじゃなく、どうしたら失敗しながらも1人で来られるかということをお話し合っています。

そのリカバリーカレッジの中では、今まで認知症について、自立について、権利について、あとは認知症条例についても話し合いをしました。認知症条例、たくさんの条例をみんなで読んで、本人が入っている条例と入っていない条例で見比べてみたら、入っていない条例はほとんどが医学モデルでした。本人の意思は関係ないんですよ。そういう話し合いをしていたら、何と当事者みんなが、仙台でも条例をつくる時に勝手にこんなのをつくられたら嫌だよねという話し合いになりました。そして、何とみんなが、じゃあ、仙台でまだつくられていないけれども、これからつくるかもしれないから、提案書をつくらうということで、一つ一つを当事者から発信していこうということで、提案書をつくりました。

その提案書を今持ってきました。ちょっと読ませていただきます。どのようなことを県に訴えたか。安心して認知症になれる社会を目指して、認知症条例の制定を要望する当事者からの提案。

私たちは認知症と診断されましたが、診断後も今までの生活を続けていきたい。そして、家族とともに安心して生活していきたいと思っています。そのためにも、当事者には多くの仲間が必要で、一方的に困り事を聞かれるような関係や先回りをやってしまうような関係ではなく、対話や相互の関わり合いに基づく関係性を大切にしたいパートナーを自分の周りにたくさんつくっていくことが必要です。

近年、認知症と診断された私たちが自分の気持ちを伝えたことにより、認知症に対する見方は変わりつつあります。私たちは診断直後から、支援する人、支援される人の関係性ではなく、できないことをサポートしてもらいながら、最初はパートナーとして応援してもらいたいのです。しかし、周りの人たちの考えや行動が変わらなければ、今までと変わらず、当事者と家族が社会から孤立してしまう環境になるのです。

認知症とは、認知機能の障害に伴って、暮らしの上で支障がある状態のこと

です。認知機能の障害を治すことは、今の医学ではできません。しかし、暮らしの上で工夫をすることで、困らなくなることや不安を軽減することは可能です。認知症になっても、それがどれだけ進行していったとしても、私は私であり、自分のことは自分で決めたいと思っていますのです。そして、診断直後から自分の気持ちを周りの人たちに伝え、自分で決める。周りの人たちは、本人の気持ちを理解し、尊重する。そのことが社会で広く認められていかなければなりません。

認知症になってからもそれまでの環境が何も変わることなく、意思決定や行動の自由が尊重され、生きがいや役割を奪われることなく、人や社会と相互に関わり合っていくこと、これらは、これからの認知症になるかもしれない皆さんの備えとなり、これからの常識となるのだと思います。私たちは、こうした備えの認識や常識を共有し、認知症に関わる施策の基本理念を明らかにし、市及び関係機関並びに市民の連携のもと、そこに当事者も参画して条例が制定されることを望みます。市民全員が安心して認知症になれる社会を一緒に考えていきましょう、というこれを一応提出させていただきました。

これは実は三鷹の条例提案をちょっとパクったんですけれども、でも、それを一つ一つ当事者たちで読んで、全部変えてきました。だから、ひな形は三鷹のものをちょっとまねさせてもらったんですけれども、それを一つ一つ、本当に一行一行を本人十何人で話し合っ、そして変えていったのがこの条例提案なんですよ。

今までって、何でもそう。ケアパスもそうだったけれども、ほとんど行政や皆さんたちがつくったものに、最後に本人が確認してって言われて、本人が参画したと言われていましたけれども、そうではなくて、本当に最初からつくっていくほうが大切かなと思ってやりました。

最後に本のお話をちょっとさせてもらおうと、この本は本当に400人近くの当事者とゆっくり話をしてきました。先ほども言ったように、本人がもう本当に嫌がっていることがあるのに、周りの人たちの優しさや心配からどうしても自由を奪われるということが多くありました。

この本を書いた理由というのが、まずは一つ、私の仲間たち、精神病院に入ってすぐに亡くなった当事者がいっぱいいるんですよ。それは、最初に家族との関係性が崩れてしまって、家族が大変だとなってしまうと、精神病院に入ってしまったということがあるとは思っただけけれども、でも、精神病院に入るときにも、いつまで入らなきゃいけないのか、どういう治療を受けるのか、何のために入るのか、何の説明もなく入ったら、それは怒りますよね。怖いですよ、皆さんだって。それなのに、入った途端に暴れたりすると、問題行動と言われて、隔離病棟に入れられて、手足を縛られた当事者がいっぱいいます。精神



病院が悪いとかではないですよ。その最初の段階で説明もなく入るということ自体がおかしいと思います。

デイサービスだって同じですよ。デイサービスだって、本人が決めないのに、行かないと拒否と言われるんですよ。無理やり行かされて、帰りたいたいと言うと、帰宅願望と言われるんですよ。怒ると周辺症状、BPSDと言われるんですよ。おかしいでしょう。当たり前行動なのに、なんでそういうふうに病名ばかりつけられるのかな。認知症だからですよ。当たり前のことなんですよ。自分で決めていかない。私が子どもに、ほら、パパがいい学校を見つけたよ、あなた行きなさいと言ったら、自分で決めていないから子どもは怒るし、行かないんですよ。当たり前ですよ。それなのに、何で認知症になると周りが決めたものに勝手に行かなきゃいけないのか、行かないとおかしなことになるのか。

この本に書かれていることは、実は当事者がたくさん言ってきたことを赤裸々に書きました。でも、それを支援者に言ったときに、めちゃくちゃ怒られました。そういうことを言うんじゃないと。だからこそ書いたんです、今回。だって、今までたくさんの当事者が同じことを言っているのに、そういうことを言うんじゃないと言われるのもおかしいし、世の中の人たちって本当にみんな優しいんですよ。優しいけれども、それが本人が嫌がっているということもあるんですよ。だからそれを今回、赤裸々に書いたのも、もしかしたら皆さんが読んだらいらいらすると思います。特に御家族の方。でも、これが現実なんですよ。本人の言葉です。だから、これを読んだ本人たちは喜んでいきます。

よく言われます。丹野君にゴーストライターがいるって。でも、これは全部自分で書きました。でも、これを書くときにも本当に工夫しましたよ。携帯で音声入力じゃべると文字になるでしょう。それをパソコンに送って、パソコンで文字を見るのがもうつらいから、読み上げ機能で聞く。それで聞くことで何回も修正しました。そうやってこうやって作り上げたのがこの本です。

本当に多くの当事者の言葉が載っていて、この間も、すごくこの言葉いいね、この言葉いいねと言うんですけれども、それは俺の言葉じゃなくてほかの当事者の言葉で、ちょっと残念だなと思いました。でも、それってうれしいことですよね。俺じゃなくほかの当事者の言葉のほうがみんな褒めるって。これはうれしいことだなと思って、本当に多くの人に読んでもらいたいなと思っています。

以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

大熊由紀子氏 ありがとうございました。

それでは、世田谷の御本人たちに登場していただきたいと思いますので、ちょっと舞台転換です。

## 【公開用動画 パネルディスカッション】

この御本はとても便利で、どうやったら忘れずに済むかというコツもいっぱい書いてありまして、私はそのあたりを一番一生懸命読んでいまして、これから認知症になる、まだなっていない人にもぜひお買い求めください。これは物すごく安いんですよ。何と800円ですよ。これだけの内容があって。時間があるので、頼まれもしないのに書いておりますが。

丹野智文氏 1,000円以下で出したいなと思っていました。やっぱり認知症の本って高いんですよ。だから、学生にも読んでもらうためにもなるべく安い本にしたいなと思って。準備ができるまで話したいなと思うんですけども。でも、本当に工夫していることがいっぱい載っていますよ。携帯電話とかITをつくっている工夫もありますけれども、本当にアナログな工夫もありますよ。一人暮らしのおばあちゃんが、いろんなところに書くと忘れるからといって、テーブルに模造紙をテーブルクロスに置いて、そこに常に書いているとかね。あと、家の鍵と敬老乗車証と財布をどこに入れたかよく分からなくなるからということで、赤い細いひもを鍵につけて、青い中くらいのひもで敬老乗車証につけて、黄色い太いひもは財布について、かばんとつながっているんだって。引っ張れば出てくるって。そういうのがいいよね。最新の技術を使わなきゃいけないと思うこともなくて、人それぞれ工夫することが大切です。

最後にちょっとだけ、工夫するとき、仮に携帯のストラップをつけるとなったときに、つけると自分が決めたとしても、携帯ストラップとかを周りの人たちが買ってくるんです。そうすると、本人は絶対使わないですからね。だって、かわいいのがいいのか、かっこいいのがいいのか、ブランド物がいいのか、みんな違うでしょう。それをただの黒いひもとかをつけられたら、それは使わないですよ。

ちょうどいいぐらいに舞台の準備ができました。

大熊由紀子氏 ありがとうございます。お手元にこの本の目次と、それから、この本をどんなに心配しながら書いたかというのが書いてあります。御家族たちがこんなに私たち一生懸命やっているのと言って腹を立てるんじゃないかしら、そういうことを何度も謝りながら本の出版記念会のときにお話しになったので、それを載せてございます。

それから、今日、時間が足りないと思ひまして、今日も出席していると思ひますが、私の大学院の修士コースを卒業した平岩千代子さんが長い長いインタビューをしてくださって、それをまとめたものも載っております。タイトルは、「認知症本人の願いをまず知ってくださいね(^\_-)- ~できることを奪わないで~」という。

それでは、右のほうから御紹介いたします。長谷部さんです。(拍手) 条例を

つくるときの。

長谷部さんがどんな方か、それから手前の澤田佐紀子さんがどんな方かというのは、この席にもいらっしゃる毎日新聞の銭場さんがとてもすばらしくまとめてくださっているのです、ここに書いてあります。

順番にどうしましょうか。(澤田)佐紀子さんは実は今日から本名を名乗られました。今までは教え子さんが世田谷にはいるからというので、S・さきこさんといっていたので、今日は記念すべき日でございます。(拍手)

手前が貫田さんとおっしゃいまして、1年半ぐらい前でしょうか、僕、認知症になっちゃったんですよというお電話があり、その頃はもう字は書けないわ、メールは使えないわ、みんなにそう言うと友達も去っていくしという絶望のところいらしたんですけれども、半年ほど前に私の大学院の授業に来ていただきました。「講演デビュー」という言葉がありますけれども、こういう講演デビューをしてからみんなの反響があまりにすばらしかったので、めきめきお元気になられて、メールをちゃんと読んで返事をお書きになると。普通、ゲストの先生というのは大体同じ答えにちょっとだけ後ろを変えるんですけれども、全部違う答えを書いていらっしゃって、どんどんよみがえっていらっしゃるという貫田さんでございます。(拍手)

もう司会は丹野さんにお任せいたします。

丹野智文氏 じゃあ、ここから始めたいと思います。

最初に、貫田さん、自己紹介をお願いします。

貫田直義氏 皆さん、こんにちは。貫田です。

今日、非常に楽しみにしていたのは、やっぱり丹野さんなんですよ。丹野さんが一生懸命あれだけしゃべっていただいて、僕は非常に強い感銘を受けました。あそこまできちんと自分の体験を語り、同時にみんなに共感を与えるというのは、これはやっぱりすごい行為ですよ。

おそらく、そういうような形で一人一人が自立する中で、この認知症について何かを見出せるような、そんな気がします。だから、僕にとってのキーワードがやっぱり自立ですよ。どうしてもみんな頼ろうという気持ちになるじゃないですか。また、みんな頼ってほしいというのがあるじゃないですか。そういうのはやっぱり一切駄目なんだよ。自分で自立していくということで、こちらは自立している先生です。どうぞ。

丹野智文氏 では、次、澤田佐紀子さん、自己紹介をお願いします。

澤田佐紀子氏 今、御紹介にあずかりました澤田でございます。

定年はしましたけれども、学校で美術を指導していました。また、最後の年の頃はちょっと怪しくなってきましたが、特別支援でもう長いことやっていましたので、それで今までの体験を生かしながら指導して、無事定年まで仕

事をすることもできました。現在は暇過ぎて、好き勝手なことができる時間ができたのがすごくうれしくて、全然自分が病気だということすら忘れてしまって、ぴょんぴょんあちこちに出歩くものですから、家族が逆に心配をするというのが現状です。

いつ、どこで、どうなるか、実は私は母が認知症になっていまして、最後のほうまで全部見届けたときに、私もいつかああいうふうになるのかなというのが予感もありましたし、現実になりつつもありますので、この辺のところは何とか取り消したいなと、別の人生をもらいたいなというのがちょっとあります。

以上です。(拍手)

丹野智文氏 ありがとうございます。

では、長谷部さん、自己紹介をお願いします。

長谷部泰司氏 長谷部泰司と申します。

今、私は82歳になっております。それで、毎日、老人として自立していきたいというのが私の信念でございまして、自立というのは何をやっているかということ、家で一生懸命カラオケを歌っております。毎日、持ち歌が大体40曲ぐらいあるんですけども、それを2回半ぐらい回るぐらい部屋の中でカラオケを歌って、それで健康を維持しようとしております。

あと、自分のことは自分ですするというのをモットーにしておりますので、食事のこととかというのはヘルパーさんに助けてもらっておりますけれども、自分で何とか生きてきていると。このままもうあと10年間頑張ればそろそろ行くところへ行くと思っておりますので、それも楽しみの一つであります。

以上です。(拍手)

丹野智文氏 長谷部さん、歌は何が一番得意なんですか。曲。

長谷部泰司氏 演歌ですけれども。

丹野智文氏 演歌。どのような。

長谷部泰司氏 幾つかありますけれども。

丹野智文氏 そうですか。よくデイサービスの中で昭和の歌謡曲とか童謡を歌うというところが多いんですけども、今、演歌と言われましたよね。あと、おばあちゃんたちに聞いたらキャンディーズがいいとかって言っているんですよ。だから、時代が変わってきているんですよ。

長谷部泰司氏 私は奥飛騨慕情とか、そういうレベルの演歌です。

丹野智文氏 この間そのデイサービスに行って、おばあちゃんたちにこれを歌いたいのって言っていたの、童謡を歌っているからね。いや、私たちが歌わないとこの人たちがかわいそうでしょうと言ったんですよ。だから、本当に本人が歌いたい曲を歌ってもらおうということが本当に大切じゃないかなと思っていて、全員が同じ曲を歌うのではなくてね、たまにはいいですけども、でも、カ

ラオケという自分が好きな曲を歌うから楽しいんですよ。

長谷部泰司氏 そうですね。カラオケを歌って100点が出たときが一番楽しいです。(拍手)

丹野智文氏 すごい。そうですか。分かりました。ありがとうございます。

じゃあ、貫田さん、ちょっとマイクを持ってもらって。希望条例をつくる時にお手伝いされたというんですけれども、希望条例についてどう思いますか。

貫田直義氏 確信を持ったほうがいいと思うんだけど、世田谷区の希望条例、これはこれまでやっぱりないものなんですよ。何が一番大きなポイントかというところ 演説みたいになったね やっぱり今現在、日本は超高齢社会に突っ走っているわけ。それで当然、認知症の人も増えるよね。そういう意味で、例えば700万人か、さらに言えば1,000万人。つまり、申し訳ないけれども、僕ら団塊の世代が今どんどん年を取ってきて、数もどんどん高齢化へ直進しているわけ。

そういう中で、みんなでどういう社会、どういう町をつくっていけばいいかというテーマなんですよ。そのテーマに対する答えが世田谷区の認知症条例、そういう位置づけがあるということを確認を持ってほしい。ということで、区長、頑張ってください。

丹野智文氏 ということは、まちづくりということですかね、条例が。この条例が仮にうまくいったら、多分、認知症以外の人たちも幸せに暮らせるんじゃないかなと思うんですけれども、どうですか、貫田さん。

貫田直義氏 同時に、もう1個キーワードがあるんですけれども、やっぱりみんなで手を携えること。みんながそれぞればらばらになるんじゃなくて。ついでに言っちゃおうと、僕の友達で何人か認知症の友達もいて、そのうちアルツハイマーになっているのもいるんですけれども、彼は会社が今現在もあると思っているの。そうすると、要するに、毎週末ぐらいに電話してきて、明日会社あるだろうと。行かないかと。何で行かなきゃいけないの、だって会社に行かなきゃいけないじゃないかって。僕のほうは僕のほうで、もう会社はいいんだよ、定年退職しているんだよって、またまた、そんなうそを言ってなんてしゃべったわけだな。

僕は要するにレビーの認知症なんですよ。彼はアルツハイマー。そういう意味では、レビーとアルツのそういう違いがあるにしても、やっぱり時代の最先端を行っている2人の会話なわけ。そうこうしているうちに、彼のほうで、実は俺、退職金をもらっていないと言い出すわけですよ。ばか、もらっているに決まっているじゃないか、奥さんに聞いてみなと言ったら、奥さんがもうもらったらわよなんて言う、そういう日々なんだけれども、その彼にしても、言ってみれば僕との関係はまだ続いているわけ。それがやっぱり非常にうれしい。



丹野智文氏 ありがとうございます。(拍手)認知症になったからといって関係性が途切れるわけではないからね。本当にありがとうございます。

では、(澤田)佐紀子さん、条例の作成に関わったと思うんですけども、どうですか。こういう会合とかに出てみて。

澤田佐紀子氏 実は情けない話なんですけど、現場にいるときはとても元気で、いろいろとぴかぴか光って頭に浮かぶことがあるんですけども、一旦家に帰ると全部消えています。ですから、どうですかと聞かれると、どういうふうに考えたかが覚えていないというのが現状なんですけれども。

丹野智文氏 そうだね、ごめんごめん。でも、それでいいと思うんだよね。別に覚えていなくてもいいけれども、こういうのに参加するということはどうですか。こういうみんなの前でしゃべってみるとかね。もともと先生だったからかな。

澤田佐紀子氏 あまり気にならないんですよね。どこでも人を押しのけてしゃべっているのはいまだに変わらないので。これは一種の病気ですね。頭の病気よりちょっと怖い病気かもしれないと思うんですけども。

丹野智文氏 今、(澤田)佐紀子さんが忘れると言ったでしょう。そのとおりなんですよね。これが病気だからね。でも、よく多くの人が言うんだけど、今日のお昼は何食べたと聞かれるんですよ。覚えていないですよ。

澤田佐紀子氏 覚えているときと覚えていないときとあるのは、もう若いときからそうです。

丹野智文氏 そうですか。でも、何でもみんな、認知症は忘れるのに、今日のお昼何を食べたと聞くんだらうと思って。覚えていなくてもいいですよ。

澤田佐紀子氏 聞く方が相手が認知症であると分かっていたら、そこまでの必要はないと思います。

丹野智文氏 だから、今日の夜は何を食べたい？と聞いてほしいんですよ。わくわくすることね。

澤田佐紀子氏 そっちがいいですね。

丹野智文氏 そうだよ。でも、みんな試すように、忘れたことを思い出させようとするのか、聞く人が多いんだよね。骨折した人に速く走れと言わないのに、何で認知症の人には忘れるなというのかが分からないなと思ってね。

澤田佐紀子氏 すごいアイデアですよ、それ。今まで思わなかったです。

丹野智文氏 そうですか。ありがとうございます。

では、長谷部さんは今日とかこういうところに上がったり、あとは条例づくりに参加したと思うんですけども、どうですか、感想。

長谷部泰司氏 今日は皆さんと一緒にこうやってお話をさせていただけるのは、一人暮らしの人間としては珍しいことなんだと。お正月みたいなものです

ね。ありがとうございます。(拍手)

丹野智文氏　じゃあ、なかなか人前でしゃべる機会はないですか。家にいたのでは1人で。

長谷部泰司氏　家ではカラオケを歌うだけです。

丹野智文氏　そうですか。でも、カラオケでも、口を動かしておくことでこうやって急なときでもしゃべれるのかなと思います。

長谷部泰司氏　そうですね。100曲ぐらいのカラオケを歌っていると、その中で大体3回か4回100点が出るんですよ。それが最高にうれしいですね。

丹野智文氏　ありがとうございます。

大熊由紀子氏　貫田さんがさっき資料の中の「せたがやはいかいSOSネットワーク」というのに文句を言いたいとかって言うておられましたけれども、どうですか。

丹野智文氏　どうですか。その徘徊について。

貫田直義氏　資料の中の一番最後のオレンジの紙に徘徊についてのQ & Aが入っているんですよ。今現在、皆さんも大体徘徊のイメージは分かると思うんだけど、何も分からなくなっちゃってどこかへ行っちゃう人、ふらふらする人というんだけど、実際に現実に見た場合に、そういう徘徊の人については、実は明確な目標や意思があります。

僕も個人的に言うと、1年半ぐらい前の段階で発病直後、しょっちゅう深夜徘徊で動いていました。4件ぐらいのコンビニを回って、マスクを一生懸命買っていたの。そういう話で、要するに目的が明確にあるわけです。それを目的がないんだと。したがってあの人はもうぼけちゃったと。それはやっぱり世田谷区の条例に対する、先ほどお話ししましたけれども、ここで徘徊の人たちをケアしろみたいな話でうたうことは基本的な理念にズれる話なんですよ。

それと同時に、徘徊している方の特徴は、不安そうで落ち着きがない、表情はぼんやり疲れた表情、女房に言わせると僕みたいな顔をしていると思うんだけど、それとあと、手ぶら、季節にそぐわない服装、両足が別々な履物。僕は秋になっても平気で、短パンとTシャツで家の周辺をうろろしているんですよ。

その点で見た場合に、徘徊している人の特徴はという、それに私が答えるというのはとんでもない話だね。そこはやっぱり皆さんも分かると思う。つまり、相手の立場になったときに、誰も好き好んで徘徊しているわけじゃなくて、たまたま今日みたいな日に外は今日いい景色だなと、ちょっと外に出たいなというふうな希望を持っていたおじいさん、おばあさんがたった外に出るのだけで、サンダルとスリッパにしておかしい格好をしているとされて、それでそのまま徘徊という話で批判されるというのが問題だと思う。

この部分については、ぜひ今後ともやっぱりみんなとしっかりすり合わせをしていきたいというふうに思っています。

丹野智文氏 ありがとうございます。(拍手)この間講演したときに、民生委員の人から、私たちは模擬訓練をやっているんですと。認知症の人を探し出して、家に帰るのが私たちの役割なんですと言ったんですよ。私はおちおちコンビニに行けないですよ。家から出た瞬間に帰らせられたら嫌だよ。そう思うんだよ。どうですかね。

貫田直義氏 もう1点。今回こういうふうな一つのイベントがあるということになったので、僕自身が今お世話になっているセンターと訪問看護・介護でいつもケアしてくれる若い人たちに対して、徘徊についてはどう思うと。そうしたら、全員がやっぱりこれは差別だとはっきり言っているわけ。何が問題かということ、そういう彼らがこの後、日本の高齢社会、そういう介護社会を支えていくわけでしょう。彼らの感覚がなぜ生きないんだと。旧態依然としたこういう認識でもって徘徊している人間を指弾するみたいな形、それはやっぱり明らかにおかしい。これは100%自信を持っておかしいと言えますので、皆さんも参考にしてください。

丹野智文氏 (澤田)佐紀子さんはどう。先ほどの徘徊模擬訓練というものに対しては。

澤田佐紀子氏 徘徊というかどうか分からないんですけども、私は毎日家から飛び出ています。ほとんど毎日徘徊と言われたらそれでおしまいなんだと思うんですけども、どこへ行くという目的が絶対にあるわけでもないし、ふらふらっと公園を散歩しているときもあるし、ちょっと電車に乗ってどこかへ行っちゃおうかなとかというのもあるので、今、縛られるものがないという開放感が一番うれしいんです。だからどこでも行っちゃおう。

丹野智文氏 そうはいても、家族や支援者は心配しないですか。

澤田佐紀子氏 一応、携帯を持っている間は大丈夫じゃないかと勝手に思っております。

丹野智文氏 貫田さん、そうはいても、家族や支援者の心配というのもありますよね。いなくなったらどうしようとか。

貫田直義氏 それは、極めて簡単な切り返しができるんですよ。なぜかというと、みんなが気楽にまちへ出られる、そういう安全なまちをつくろうと、そういう安全な世田谷区をつくろうという大前提の意見もある。

丹野智文氏 安心して出かけられるまちをつくろうということですよ。

貫田直義氏 そういふこと言うと 言い忘れていた。最近、腹が立ってしようがないのが自転車なんだよね。自転車が必ず突っ込んでくるわけ。必ず体にぶつかってくる。ぶつかってくるのは大体おばさんが多いけれども、こっち

も本当に腹が立つんだよね。

そういう危険性がその一方であるわけであって、そういうことで見た場合に、どうすればみんな安心して安全で、おじいさん、おばあさんもしっかり散歩できるか。とりわけこれはいいなと思っているのは、いつも朝一の段階で保育園の子どもたちが、バギーっていうんですか、あの荷物か何かに7人くらい乗っけられて、それであとピンクとか紫色のキャップ、それで歩いているじゃないですか。子どもたちもみんな喜んでいるし、こっちも手を振ると、向こうも何でこんなじじいみたいな顔をしているのかなと手を振ってくれるんだよね。

つまり、そういうまちにやっぱり暮らしたいという気がするわけ。ということです。すいません、度々。

丹野智文氏 長谷部さんは今1人で出かけたりにしていますか。

大熊由紀子氏 長谷部さんはお耳が遠いので、手伝ってもらって。

長谷部泰司氏 今、御質問があったのは、基本的には家の中での生活をどう楽しくするかということをしていたりして、1人で乗り物に乗って歩くということとはしないことにしています。危ないですから。商店街に弁当を買いに行ったりはしますけれども、それぐらいまでですね。

丹野智文氏 そのお弁当を買いに行くときとかに道に迷ったりはしていないですか。

長谷部泰司氏 それは大丈夫ですね。そんなに距離を歩かないようにしていますから。

丹野智文氏 ありがとうございます。

長谷部泰司氏 家の中に楽しみを見つけておりますので大丈夫です。

丹野智文氏 それはいいですね。

(澤田) 佐紀子さんは道に迷ったりはしない？

澤田佐紀子氏 しょっちゅうします。ふだん行っているところじゃないところにぼんと出かけるとなるんです。でも、まだちゃんと帰れます。

丹野智文氏 道には迷うけれども、帰ってこられるということだね。

澤田佐紀子氏 一応、帰るのは帰れるんですけども、あれ、どこを歩いているんだろうと一瞬考えるだけで、あとは口を使える限り使って方向を確認します。

丹野智文氏 そうだね。ということはさ、徘徊ではないんだよね。

澤田佐紀子氏 ちょっと違うかもしれないですね。

丹野智文氏 でも、仮に支援者たちが本当に心配だからもう1人で出かせないでと言われたらどうします。

澤田佐紀子氏 無理です。そんな人がくっついて散歩なんて面白くも何ともないですよ。

丹野智文氏 そこなんだよね。でも、本当にそうなんですよ。1人で歩きたいときもあるし、1人で服を見たいときとかもあるよね。でも、認知症というと、今までのだよ、昔の認知症というと、365日24時間誰かが常に付き添っていきなきゃ駄目ってなるんですよ。そうすると鬱っぽくもなるし、あとは、誰かがいないと不安になって、依存という病気になってしまっているんじゃないかなと思うんですよ。だから、今、(澤田)佐紀子さんが言われたように、今こうやって元気なのは自由があるからだと思うんですよね。その自由を奪われないようにしたいですよね。

澤田佐紀子氏 頑張りたいです。火の元だけ気をつけるようにしています。

丹野智文氏 火の元も、私の仲間たちと話したら、何と、鍋とかガスコンロを焦がすからということで話し合っって工夫したら、最新のガスコンロにすると勝手に火が止まるんだって。

澤田佐紀子氏 そういふのがありますよね。

丹野智文氏 焦げもしないと言っていた。そういうのに交換することで安心もできますよね。

澤田佐紀子氏 そうですね。それは予算の都合もありますよね。

丹野智文氏 そうですね。

澤田佐紀子氏 そういふのがあるということをお勉強させていただきました。

丹野智文氏 大体もう時間になってきたんですけれども、数年前、私が講演し始めた頃は、本当に当事者はしゃべりませんということをおずっと言われ続けてきました。それで、丹野君は若いからでしょうとか、丹野君だからしゃべれるんだよと言われてきました。今日、3人を見てどうですか。普通ですよ。普通にしゃべれるんですよ。これが当たり前なのに、よくあるですよ。うちの地域にはしゃべれる当事者がいませんとか、うちの家族はしゃべれませんとか言うけれども、しゃべれますからね。私は400名の人たちとしゃべってきて、しゃべれないという人たちもしゃべります。しゃべらせると止まらなくなります。

だから、皆さんの地域にも、いわばここにいる人たちの話を聞くのも大切だけれども、皆さんの目の前にいる当事者に話を聞いてみてください。その人がこれから何をやりたいのか、一緒に考えていってきて、安心して出かけられる、安心して過ごせる世田谷区にしてもらえればなと思っています。

どうもありがとうございました。(拍手)

大熊由紀子氏 ありがとうございます。診断される病院、診療所で待っていてお仲間にするということで、今、仙台には20人、出前でお話ができる人たちがいるそうです。90万人の私たちのところとしたら、今のところまだ3人の方が話しているように見えますけれども、身近なところに必ず、話を途中で御



家族の人が気を利かせて話してしまわないで、御本人からゆっくり聞くと話せる方がいっぱいいらっしゃるし、その物の見方ははっとするようなことがたくさんございます。

ここで10分間ほど休憩をしますので、どんなことでもきっと皆さんは答えてくださると思いますので、その間に質問とか御意見を書いていただければと思います。小さい紙が入っています。

午後 3 時15分休憩

午後 3 時28分再開

### **【公開用動画 意見交換～閉会】**

大熊由紀子氏 それでは、第3部を始めたいと思います。

それでは、時間も迫っていますので、この4つのプロジェクトがありまして、それぞれに世話人という人が設けられておりますので、その順番から言うと、中澤まゆみさんが今までのサポーター養成講座というのをこんなふうにもっとよりよいものにしようというので案をつくってくださっていますので、どうぞ、まゆみさん、始めてください。

中澤まゆみ氏 ありがとうございます。情報発信をやっている中澤と申します。こういったアクションガイドというものをつくっていますので、ちょっと御紹介をしたいと思います。

新講座というふうに呼んでいます。今まで認知症サポーター養成講座というのをやっていたんですけれども、それに代わる講座というのを世田谷でもやろうということで、狙いとポイントをちょっと話してみたいと思います。

一人一人にやっぱり認知症を自分事として考えていくということで、今までのサポーター養成講座は本人が受けられる感じじゃなかったんですね。じゃなくて、本人も一緒になって受けられるような講座をつくりたいということで考えました。

それから、認知症になってもやっぱりよりよく生きていく可能性、これを考えたものをつくりたいねということで、さっきから何回も言っていますけれども、認知症観の転換ですね。

皆さん、やっぱり認知症って病気で怖いというふうに思っていたらっしゃる方が多いと思うんですけれども、そうじゃなくて、認知症というのは環境の変化によって変わっていくんだ、そういった可能性があるんだということを伝えたいということで考えました。

それから、体験者から可能性、それから共生を学ぶというのもポイントにしたいということで、これを冊子と動画、両方でやっていこうということを考えています。

冊子づくり、これはいろんな人の意見を聞きました。私たちは懇話会というのをやっております、大熊由紀子さんと永田久美子さんと私で出前で20か所以上、世田谷区を回って、いろんな意見交換をしています。条例の説明もしています。そこでいろんな意見を聞いたり、あと、認知症在宅生活サポートセンター、あんしんすこやかセンターの職員さんたちにアンケートを取って、いろんな意見を聞きました。

これは小さくて読みにくいと思うんですけども、新講座とサポーター養成講座がどう違うかというのをまとめてみました。簡単に言うと、認知症サポーター養成講座は医療モデルです。やっぱり認知症というのがどういう病気なのかというところから始まって、最初から病気で始まっちゃうわけですね。そうじゃなくて、やっぱり認知症がどういうものかというのを知っていこう、それから新しいイメージをどうやってつくっていくのかみたいなことを生活モデルで考えていくというのが今回の新講座です。古いのは32ページあったんですけども、今度は28ページぐらいで考えています。

中身をちょっと見てください。これは目次です。ようこそなんていうのがあって、それから、目次を見ていただくと、知ろう、そして考えてみよう、話し合ってみよう、ちょっと一緒にアクションをやってみよう。そしてアクション、これを広げていこうという、そういったつくり方になっています。

本人からの発信、やっぱり本人たちが入らないと話して始まらないんじゃないかなということで、地域でもやっぱり御本人たちはたくさんいらっしゃいます。だから、そういった御本人たちの意見をちゃんと聞いてやっていきたい。

そして、これは28ページ全部を見せるわけにいかないの、ポイントだけお話ししますけれども、古いイメージ、オールドカルチャーですね。これから新しいイメージに変えていこうという、そういったことも一緒に考えていこうということですね。

「地域とのつながりを考えよう」。皆さんはやっぱりいろんなところでいろんな活動をされているので、つながりはいっぱいあると思います。そういったつながりを生かしながら、これからじゃあどういふことをやっていったらいいのかということ認知症の人にも交えながら考えていきたい。だから、アクションにみんなつながっていくという、今までのサポーター養成講座だと学んでおしまいだったんですけども、学んでおしまいじゃなくて、それをアクションにつなげていくという、そういった講座になっています。

中に、医療的なものもやっぱりちょっと入れてみたりして、特徴は、ここに二次元コードをいろいろ入れています。分からないところは二次元コードを読み込んでほかのページに飛べるみたいなタコ足的な講座も考えています。これで自分たちの希望を話し合うことで、それを地域のアクションにつなげていく。

小さなアクションです。例えば散歩に行きたい、居酒屋に行きたい。御本人たちの小さな希望をかなえると言ったらおかしい、一緒にやることで地域のアクションを起こしていく。これは手挙げ方式でやっていきたいなというふうに思っています。そして、「私の希望ファイル」にそれをつなげていくというようなことができればなというふうに思っています。

簡単ですけれども、こんな感じで今、新講座を考えていますので、ちょっと御報告です。(拍手)

大熊由紀子氏 ありがとうございます。今のお話の中に「希望ファイル」もこの地域の中で話していきながらつくっていくというのがありましたので、希望ファイルということを考えて、条例の中に入れた西田淳志さんから一言。

西田淳志氏 今日は参加させていただいてありがとうございます。私は世田谷の条例の中で希望ファイルというプロジェクトをしっかりとみんなで作っていく、そういうところに参加させていただいております。

なぜ希望ファイルが必要なんでしょうか。それはおそらく、希望をこれまでことごとく諦めさせてきたからじゃないでしょうかね。認知症になったということで、いろんな希望、思いというものを諦めてくださいということを総がかりでやってきてしまった歴史があるんじゃないでしょうか。そこをやっぱり立て直していくということが大事なんだと思います。

そのための希望ファイルのプロジェクトということになりますけれども、これは多くの方々と一緒につくっていくものだと思っていますので、ようやくコロナも少し、一旦かもしれませんが、落ち着いてきました。こういう状況で、今日御参加いただいている認知症を経験しておられる当事者の方々ともぜひ一緒に協力いただいて、多くの方々の参画のもとにしっかりとしたものをつくっていきたいと思います。ファイルをつくるのではなくて、諦めさせる文化をどうやって変えていけるのかという、そういう挑戦、大きい挑戦ですので、何か書式を決めて配って終わりということにならないような仕掛けをみんなと一緒に考えていきたいと思っています。

以上です。(拍手)

大熊由紀子氏 ありがとうございます。

それでは、本人というのを中心に、これは遠矢ドクター、お願いいたします。

遠矢純一郎氏 参加させていただいてありがとうございます。桜新町アーバンクリニックで在宅医療をやっております遠矢と申します。

今日も本人さんたちのお話を伺う機会をいただけて、大変勉強になりました。やっぱりいろんなことに気づかされるし、私も在宅医療を通じてたくさんの認知症の方と関わってはいますが、やっぱりいろんな意味で勝手にこっちが思い込んでいたりしていることが多いなということを改めて感じさせられました。

実は、私の父も鹿児島に住んでいるんですが、くも膜下出血を3年前にやっ  
てから認知症状を発症しまして、この間、久しぶりにコロナが少し落ち着いた  
ので帰る機会があって、もう僕のことすら分からなくなっているかななんて思っ  
て帰ったんですが、幸い、僕の顔を見た途端に、おお、帰ってきたのかみたい  
なことを言ってくれて、ほっとした思いでした。ただ、やっぱりいろんなこと  
が、すごくおしゃべり好きな父だったんですが、あまり話さなくなっていたり、  
大分変わってしまったなと勝手に思っていたんですが、僕が父の介護ベッドの横  
でうとうととしていたら、はっと気がついたら父がそこにいて僕に布団を掛け  
ようとしていたんですね。そういう今まで変わらない父を感じられて、とても  
うれしく思いました。

今日も当事者の方々の語りの中から、本当に自分たちが自立していきたく  
いんだということをたくさん語ってくださって、それこそやっぱり、それを周りに  
いる御家族とか支える僕たちが結構制してきたんじゃないかなということも反  
省しました。

私の担当は本人発信というところにあります。うちの法人では、世田谷区か  
ら認知症在宅生活サポートセンターというところを担当させていただいており  
まして、今、そこでたくさんの当事者の方々と出会う機会をいただいています。  
実は長谷部さんとか貫田さんもその中で出会うことができた当事者の方々で  
す。

こうやって大きな場で発信していただくのはもちろんですけども、もっと  
小さい、さっき冒頭で区長さんがお示しになられた28か所のあんしんすこやか  
センターとか小さい区域で、本当に我がまちで認知症の方々と語り合う機会を  
つくれたら、もっと身近で、自分のところにもそういう人たちがいる、そう  
いう人たちの話を聞くという機会を設けられたら、もっともっと世田谷全体が少  
しずつ変化してくる力になっていくんじゃないかと思っておりますので、ぜひ  
そういう機会をつくっていきたくと思っています。これからどうぞよろしくお  
願いします。

ありがとうございました。(拍手)

大熊由紀子氏 それでは、4番目のプロジェクト、長谷川幹さんをお願いい  
たします。

長谷川幹氏 地域づくりのプロジェクトの世話人をしていきます長谷川です。  
よろしく申し上げます。

先日、3地区の人たち、まちづくりセンター、社会福祉協議会、あんしんすこ  
やかセンターの人たちとの報告会と申しますか、話し合いをしました。そこで、  
認知症の御本人とまちの人たちがどういうふうに対話をしながら、課題とい  
いますか、どう進めていくかが本当にクローズアップされました。

今日のこういうふうに大きな舞台に立たれるというのは、おそらく時間がかかると思うんですね。(澤田)佐紀子さんが姓を名乗ったのも今回が初めてという、段階的にいくということで、ただ、常にそういう方たちと一緒にやっていくことがおそらく認知症観の変換だとか、実践的な中でおそらく変わっていくだろうなと思います。

ただ、僕も実は脳卒中の人と色々な形で三、四十年、いろんなことをやってきましたけれども、やっぱり時間がかかります。お互いが。御本人も僕らもそうですけれども、何かあったときに最初にふっと一歩出す人もいれば、ちょっと様子を見る人もいますから、認知症の人は当然そういうことなんですね。誰でも表舞台に出るということはなかなか難しいのが普通ですから、人間が何人か集まれば、そういうことが前提です。あまり無理に出ていただくというよりは、ちょっといい雰囲気と一緒に話をして一緒に解決しようという姿勢がやっぱり我々に求められているかなと思っています。そういう形で地域づくりを28か所に広げていければいいなと思います。

もう1点です。全介助で車椅子の人に僕はよくお会いするんですけども、電動車椅子になったときに何が起きるかということ、それまでは、車椅子というのは介助の人に押してもらいますよね。そうすると、右に行きたいとか、真っすぐとか、いろいろ言わなきゃいけない。だけれども、電動車椅子で全介助の人が自分でやると、このときだけ自由だと言うんです。今日も似たようなお話があったと思いますけれども、認知症に限らずいろんな障害のある人とおそらく共通する考え方が僕は根底にあるなと思っていますので、一つの切り口として認知症のところから始まるんですけども、いろんなところに考え方がイコールになっていくというふうに思っています。それがおそらく地域づくりにつながっていくというふうに思っています。

今後ともよろしくお願ひしたいと思います。(拍手)

大熊由紀子氏 ありがとうございます。

では、永田久美子さんは全国各地のこういう問題にアドバイスしておられますので、どうぞお願いします。

永田久美子氏 永田といいます。

今、4つのプロジェクトのお話がありました。最初に新講座の話をしてくださった情報発信・共有プロジェクトが1つ目。そして2つ目が、遠矢先生がお話ししてくださった本人発信、そして本人が参加して共につくろうというプロジェクト。そして3つ目が、本人が自分の願ひ、望みをしっかりと持ち、考えながら、それを大事に地域に展開していこうという希望ファイルプロジェクト、西田先生が話してくださった。そして、4つ目のプロジェクトが今、長谷川先生が話してくださった地域づくりプロジェクト。希望計画ではこの4つのプロ

ジェクトが具体的な動きとして掲げられていますが、ばらばらに走るのではなくて、全部を一体的に連動させながら動こうというのが計画の大事なところです。そのつなげていくことを今、走り回りながら一緒にやっているところです。

つなげるための一番のポイントは、本人の声を聞きながら本人とともにという点です。世田谷で認知症になってからも、今日、皆さんがおっしゃってくださったように、自分が自分であることに変わりなく、これからも自分の力で、自分で決めながら、自分の時間を自分らしく生きていく、そのためにこの条例が空中分解しないように、本人の声を聞きながら本人と一緒につくっていくということが最も大切です。そこを誰かがやるのではなくて、区民みんなと一緒に取り組んでいく。実際に取り組んでみることで、やっぱり本人と一緒にやっていくことだよとか、つくっていく途中で本人と一緒に企画をしたり、本人と一緒に汗を流しながら、それをあたりまえのことにしていく。あと評価、やってみてどこが変わって、やってみてよかったかなという評価は必ず区内で暮らしている本人さんに、少しずつ変わってきたか、いや、まだまだ足りないところは何だろうみたいなのを本人にお聞きしながら評価をして、すぐには変わらないけれども、ちょっとずつでも持続しながらよりよくしていく。本人とともに考えながら、よりよく見直しながらという、今そんな途上の入口です。

この条例が施行されて1年経っていますが、なかなか目に見えにくい、すぐには変わらないけれども、この1年間、本当に各地域で話し合い、本人の方たちも入りながら。この間は長谷部さんが一緒に小学校に行って話してくださった。子どもたちと一緒に好きな食べ物の話で、長谷部さんが肉が大好きと言ったら、子どもたちも肉大好きって、一緒に焼き肉を食べたらいいねみたいな、子どもたちと一緒に話が盛り上がりました。それぞれ本人が自分の周りから声を上げ、一緒に考えながら、誰か一部がやることではなく、ちびっ子から若者、中年、お年寄り、超高齢の方、みんなと一緒に話し合いながら一緒にやれることを動き出していく。こうしたがこれから1個1個もっともっと広がればいいなというふうに思っています。

今日ここにおられる長谷部さん、(澤田)佐紀子さん、貫田さんだけではなく、今この会場に私が存じ上げているだけで2人の御本人が今日のために自分で選んでここに来られています。チャンスがあれば、自分なりの思いを伝え、自分なりに生きる力を出しながら、さっき冗談をいっぱい言ってくださったように私たちを和ませてくれて、認知症になってもこんなに生き生きすてきに生きられることを示してくださる。そういうチャンスをみんなが本当は持っているはず。今、世田谷で3万人を超える認知症の人がおられる、一人一人が少しでも一緒によりよく暮らせる、そんなまちをつくっていかれたらなと思っています。今、まさに進行形。どうもありがとうございました。(拍手)

大熊由紀子氏 終わりの時間が決まっておりますのに、こんなにたくさん御質問をいただきちゃってどうしようかと思ってるんですけども、非常に簡単なものを一つ。

レビー小体型の認知症というのを初めて知ったんだけども、どういうふうに幻が現れて、それはそのときは本当のことだと思ってしまうのかということ。プログラムの中には、ソファー後ろからゴリラが出るとか、これまでのを絵にしてくださっていますが、それは何ですか。

貫田直義氏 認知症そのものをいった場合に、アルツハイマー、レビー小体、それから脳の血管性、大きく分けるとその3つの理由があって、脳の疾患というか、頭がいろいろとこんがらがるといったようになる。僕がなっているのはレビー型認知症、これは要するに、年を取ってきて老化で頭にごみがたまってきて、そのごみのかすが頭の後ろにくっついて、それがそのままおかしくなっちゃったという、単純に言うとなんかそういうことなんだよ。

それで、何が一番困るかということ、やたらめったらいろいろと病気を背負うんですよ。つまり、認知症って、じゃあ自分もレビーだなという話をしたと思ったときに、やっぱり同時に喉の嚥下障害があるというふうに指摘されたし、それからあと、食事療法、それからあと、排便、排尿、それからあと、自律神経失調関係、いろんな病気がいっぱい来るわけ。それで、はって気づいてみた場合に、みんながバックアップしていることによって、口腔ケアを一応クリアさせて、それからあと排便関係もすっきりさせて、つまり、口から入れるものと出すもの、そこを整えて、半年ぐらいたったらかなり元気になっちゃったという、そういう単純な病気でした。

それで、単純じゃないのは、何が一番単純じゃないかということ……。

大熊由紀子氏 時間が限られているので、この御質問は、どんな幻かが知りたいんですって。

貫田直義氏 やっぱり、いろんな幻視が見える。そういう意味でこれは、たまたまスケッチブックに全部書いていたものを今日は持ってきたんですけども、例えば白い柵が一斉に蛇に変わる。それからあと、もう1個は、家のすぐそばの十字路で、要するに電柱を引っこ抜いている、放り上げている、そういう悪さをやっている子どもがいる。こういうのがぱっと見えちゃう。

普通、常識的に見ると怖いなというふうにみんな思うかもしれないけれども、全然僕にとっても怖くなかった。むしろ、自分自身の脳がしょうがないなという形で、ちょっとふざけんなど、いいかげんにしろというふうに思ったわけで、もちろんこういうふうなときに、例えば蛇か何かでも、ニシキヘビが出てきたら、それはやっぱり逃げますよ。それからあと、ニシキヘビもそうだけれども、そうだと、一番最新のやつは、いろいろ入れっ放しのがいっぱいあって、ちょっ



と待って、もうすぐ終わりますから。

大熊由紀子氏 時間が限られております。

貫田直義氏 これは幻視。明らかに。朝起きて、ベッドの下に糸くずが落ちている。赤と黒がこういうふうに交じっているわけ。普通だったら、それは糸くずだから、拾い上げればいいわけですよ。ところが、拾い上げられない。消えちゃう。ここしばらくこいつにいじめられているの。女房ともども、これは一体何だと言っているんだけれども、女房も結局、掃除機をかけてもよく分からない。やっぱり幻視じゃないのというふうに言われて、しばらく様子を見ているという、これが最新情報です。

大熊由紀子氏 ありがとうございます。（拍手）

今度はちょっと重い質問で、権利という言葉が条例にいっぱい出てくるけれども、世田谷区はどうやってその権利を保障してくださるのでしょうかというのは、ちょうど区長さんがいらっしゃいますので。

保坂区長 冒頭の発言にもつながるんですが、こののとも生きる希望条例の理念とか趣旨は会場の皆さんにもよく伝わったと思いますし、その理念とか趣旨に基づいてこのシンポジウムを運営されているんですね。

ただ、過去を振り返ると、丹野さんの御本に出てくるように、認知症になったら途端、もうこれは不治の病なんですよと、人間としていろんなものを失いますよと、いろいろ危険だから本人の言うことはあまり聞いちゃ駄目ですよとか、いろいろ言われてきたというか、それはよかれと思って行政の側も、あるいは医療や福祉の側も言ってきた部分がありますよね。それは、でも、今日のシンポジウムで分かったように、相当ずれがありますよと。

人権というのは、御本人の尊厳を尊重するということですね。子どもの人権であれ、障害を持つ方の人権であれ。これまで御家族がどう困っているんですかと、どうしたらいいですかということを、御本人もいるんだけれども、御本人抜きで相対して話をしてしまっているようなところがあったんじゃないかと、丹野さんの本にも度々出てきます。

ですから、少なくとも世田谷区の介護や福祉の現場では、御本人はどうなんですかと、家族が代行して言う前に、御本人の気持ちややりたいことにしっかり寄り添うということが重要なんだという認識を急いで広げなきゃいけないなということでございます。

大熊由紀子氏 ありがとうございます。

今出てきた御家族については、長谷部さんとか（澤田）佐紀子さんとかはどういうことを望んでおられますかという質問があります。もう大分答えは既に出ているような気はしますが、一言、二言、長谷部さんのほうから。

パートナー工藤幸子氏 もう一度質問を、すみません、お願いします。

大熊由紀子氏 家族にどういうことを望んでいますか。

長谷部泰司氏 私個人の話ですが、私は基本的には1人で暮らしたい、こう思っています。老人として自立したいというのは、そういう意味ですね。しかし、1人でできないところは必ずあります。私ができないことの中で、隣におります(パートナー工藤氏)幸子にお願いしたのは、金銭管理ということです。年金を頂いたら、そのお金は幸子に渡して、幸子から私がお金を頂くというようにしたら、お金をなくしたり落としたりしてしまったりした事故が2回ほどあったんですけども、それも防げました。

考えてみたら簡単なことなんですね。だから、そういうことを原点にして、今、2人の関係をどれだけ穏やかに過ごしていけるか、これからが大きな課題になるんじゃないかと思います。

何かありましたら。

大熊由紀子氏 (澤田)佐紀子さんから言っていたいて。

澤田佐紀子氏 実は今、私は、子どもも大きくなって自由に、羽が生えまして、ほとんど一緒に暮らしていないようなところもあるんですけども、1人でできなくなったらどうしようとかという心配もなかったわけではないんですが、以前よりも火の元のチェックやなんかは気をつけるようになり、かえって安全になっている部分もあるので、これも結構いいかなと今、自分で置かれている環境を一応意識して生活するようになりました。

以上です。

大熊由紀子氏 ありがとうございます。ちょうどここに質問があって、丹野さんの御本の中でも、一人暮らしの人が案外よくやっているって、その秘密はどの辺あるのでしょうかというのと、もう一つは、仙台で20人もお仲間が集まっていらっしゃる。世田谷区はまだ三、四人というこの状況をどうやったら変えることができるのでしょうか。

丹野智文氏 今日、3人がこうやって人前でしゃべること、私もしゃべってみたいという人が一人一人増えてくるんですよ。だから、皆さん、この3人が常に笑顔で暮らしていってくれば、一人一人増えてきますよ。それだけじゃないかなと思っています。

大熊由紀子氏 一人暮らしでも大丈夫という。

丹野智文氏 一人暮らしのほうが生き生きと暮らせますよ。工夫するから、ちゃんと。自分のことは自分でやろうとするから元気になるんですよ。どうしても御家族さんは心配で、ついつい先回りをしてしまえばするほどできなくなってしまう部分があるので、一人暮らしの人のほうが多分工夫をしたりしているかなと思っています。

大熊由紀子氏 ありがとうございます。

何だかもう時間が来ちゃったんですよね。とても残念なんですけれども。このたくさんの御質問は、これからこの条例を現実のものにしていくために大いに活用させていただきたいというふうに思っております。事務局がとても心配そうな顔をしておられるので、でも、いいお話でしたよねとか言っちゃって。  
(拍手)

丹野さんの本を僅か800円ですからお買い求めになると、目からうろこがぼろぼろという。これは、線を引いているうちに全部マーカーだらけになっちゃったとかいう人もいるくらい、非常に意味のある本だというふうに思っております。外で本当は販売したいところですけども、どんどん売れちゃっているそうですので、皆様もどうも、こんな下のほうにいていただいて、世話人の皆さんも申し訳ございませんでした。保坂さんもうありがとうございました。

保坂区長 ありがとうございます。(拍手)

望月介護予防・地域支援課長 では、ここで保坂区長のほうから一言お願いいたします。

保坂区長 長岡部長、一言言って。シナリオではここで部長なんです。

長岡高齢福祉部長 それでは、高齢福祉部長の長岡から一言、御挨拶をさせていただきます。

本日はお忙しい中、たくさんの方に御参加いただきまして、数を数えてみましたら、212人の方に御参加いただいております。誠にありがとうございました。  
(拍手)

本日は、国の希望大使であられる丹野智文様の基調講演と、世田谷区民である長谷部泰司様、澤田佐紀子様、貫田直義様をお招きいたしまして、認知症体験者の方からの貴重なお話をいただきました。ありがとうございました。(拍手)

また、大熊先生をはじめ、6人の委員の先生方と、区長にも参加いただきまして、ちょっと時間が足りなくなりましたけれども、活発な意見交換、ありがとうございました。感謝申し上げます。(拍手) 皆さん、ありがとうございます。

この基調講演、パネルディスカッション、意見交換を通じまして、本日参加いただいております会場の皆様方、認知症について新しいイメージを持つことはおできになったのでしょうか。いかがでしょうか。認知症を自分のことと捉える、認知症に備える、認知症体験者の方へのパートナーなど、認知症観の転換について考える機会となりましたら幸いです。

今後も認知症体験者の方々に御参画をいただきながら、また、認知症体験者を含む区民の皆様、地域団体、関係機関、事業者の皆様方の御協力を得ながら、全ての区民が自分らしく生きる希望を持ち、本人の意思と権利が尊重され、安心して暮らし続けることのできる地域共生社会の実現を目指して取り組んでま

いります。どうぞよろしく願いいたします。

本日はありがとうございました。(拍手)

保坂区長 一言だけね。

多分、物すごい質問とか御意見があって、ほんの一部しか時間の関係で取り上げられなかったのが、今日せつかく丹野さんの名進行で、本当はもっともっと聞いていたいという方も多かったんじゃないでしょうか。なので、この条例をまだまだ具体的な現場にしっかり根づかせていくのに、ワークショップであるとか、オンラインも対面も含めて、しっかり掘り下げる機会を区としても継続したいと思いました。

どうも皆さん、ありがとうございました。(拍手)

望月介護予防・地域支援課長 ありがとうございました。

本当にまだまだお話を聞いてたくさん伺いたいところですけども、お時間を少し超過しております。こちら側の数々の不手際、本当に申し訳ございませんでした。

以上をもちまして、本日のイベントは終了させていただきます。

お願いとお知らせが3つあります。

1つは、アンケートの御協力をお願いいたします。回収ボックスがございましたので、御提出いただければと思います。

2つ目、皆様、お忘れ物のないようにお気をつけてお帰りください。また、ごみなどにつきましては、お持ち帰りくださいますようお願いいたします。

3つ目です。本日、こちらのイベントについて録画しております。この動画につきましては、11月末以降、区のホームページのユーチューブで公開する予定です。今日いらっしゃることができなかった方などにもお知らせいただければ幸いです。

長時間にわたり本当にありがとうございました。(拍手)

午後4時5分閉会